

奥の細道（松尾芭蕉）

01 序文 じょぶん

つきひ はくたいのかく
月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。

しやうがい
舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは、
ひびたみ 日々旅にして旅を栖とす。

こじん
古人も多く旅に死せるあり。

へんうん
よもいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひ
かいひん やまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋にくもの古巢
こぞ をはらひて、やや年も暮、春立てる霞の空に白河の関こえん
かすみ と、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきに
がみ あひて、取るもの手につかず。

やぶ
ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかえて、三里に灸すゆ
かさ おつ くるより、松島の月まず心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風
べつしよ が別墅に移るに、

すみかわる
草の戸も 住替る代ぞ ひなの家

おもてはちく いおり
面八句を庵の柱にかけ置く。

02 旅立ち たびたち

やよい
弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月はありあけに
すえ 弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月はありあけに
ふじ 谷中やなかの花の梢、またいつかはと心ぼそし。

よい
むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。

せんどさんぜんり
千じゆといふ所にて舟をあがれば、前途三千里の思い胸にふ
まほうし さがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ。

なみだ
行く春や 鳥啼魚の 目は泪

ははじめ
これを矢矢の初として、行く道を進まず。

とちゆう
人々は途中に立ちならびて、後ろかげの見ゆるまではと見送
るなるべし。

03 草加 そうか

げんろくふた
ことし元禄二とせにや、奥羽長途の行脚ただかりそめに思ひ
ごてん たちて、呉天に白髪はくはつの恨みを重ぬといへども、耳にふれてい
うら まだ目に見ぬ境、もし生いきて帰らばと、定なき頼みの末すえをか
さかい け、その日ようよう早加そうかといふ宿にたどり着きにけり。

瘦骨の肩にかかれるもの、まずくるしむ。

ただ身すがらにと出で立ちはべるを、帔子一衣は夜の防ぎ、
ゆかた・雨具・墨筆のたぐひ、あるはさがたき 餞 などし
たるは、さすがに打捨がたくて、路頭の煩となれるこそわ
りなけれ。

04 室の八島

室の八嶋に詣す。

同行曾良がいわく、「この神は木の花さくや姫の神ともうし
て富士一躰なり。

無戸室に入りて焼きたまふちかひのみに、火火出見のみこ
と生れたまひしより室の八嶋ともうす。

また煙を読習しはべるもこの謂なり」。

はた、このしろといふ魚を禁ず。

縁記のむね世に伝ふこともはべりし。

05 仏五左衛門

卅日、日光山の禁に泊る。

あるじのいいけるやう、「わが名を仏五左衛門といふ。よろず
正直をむねとするゆえに、人かくはもうしはべるまま、一夜
の草の枕もうとけて休みたまへ」といふ。

いかなる仏の濁世塵土に示現して、かかる桑門の乞食順礼
ごときの人をたすけたまふにやと、あるじのなすことに心を
とどめてみるに、ただ無智無分別にして、正直偏固の者なり。

剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質もつとも尊ぶべし。

06 日光

卯月朔日、御山に詣拝す。

往昔この御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時、日光
と改めたまふ。

千歳未来をさとりたまふにや。

今この御光一天にかかやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵

の栖すみ穩かなり。

猶なほ憚ばかり多くて筆ふでをさし置おきぬ。

あらたうと 青葉あおば若葉わかばの 日の光

07 黒髪山くろかみやま

黒髪山くろかみやまは霞かすみかかりて、雪ゆきいまだ白しろし。

剃そり捨て 黒髪山くろかみやまに 衣更ころもがえ 曾良

曾良そらは河合氏かわいしにして、惣五郎そうごろうといへり。

芭蕉ばしょうの下葉したばに軒のきをならべて、よが薪水しんすいの労ろうをたすく。

このたび松島まつしま・象潟きさがたの眺ながめともにせんことを悦よろこび、かつは羈旅きりよの難なんをいたはらんと、旅立たびたちつ 暁あかつき髪かみを剃そりて墨染すみぞめにさまをかえ、惣五そうごを改そて宗悟そうごとす。

よって黒髪山くろかみやまの句くあり。

「衣更ころもがえ」の二字力にじちからありてきこゆ。

廿余にじゅうよ丁山ちやうやまを登のぼつて瀧たきあり。

岩洞がんどうの頂いただきより飛流ひりゅうして百尺はくせき、千岩せんがんの碧潭へきたんに落おちたり。

岩窟がんくつに身みをひそめ入いりて瀧たきの裏うらより見みれば、裏見うらみの瀧たきともうし伝えつたはべるなり。

しばらくは 瀧たきに籠こもるや 夏げの初はじめ

08 那須なす

那須なすの黒くろばねといふ所ところに知人しるひとあれば、これより野越のぐえにかかりて、直道すくみちをゆかんとす。

遙はるかに一村いつそんを見かけて行くに、雨降ふり日暮くる。

農夫のうふの家に一夜いちやをかりて、明あればまた野中のなかを行ゆく。

そこに野飼のがいの馬うまあり。

草刈かる男おの子こになげきよれば、野夫やふといへどもさすがに情なさけしらぬには非あらず。

「いかがすべきや。されどもこの野は縦横じゅうおうにわかれて、うゐうゐしき旅人たびひとの道みちふみたがえむ、あやしうはべれば、この馬のとどまる所にて馬を返したまへ」と、かしはべりぬ。

ちいさき者ものふたり、馬うまの跡あとしたひて走る。

ひとり 独は小姫にて、名をかさねといふ。

聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは 八重撫子の 名成るべし 曾良

やがて人里にいたれば、あたひを鞍つぽに結付けて、馬を返しぬ。

09 黒羽

黒羽の館代浄坊寺何がしの方におとずる。

思ひがけぬあるじの悦び、日夜語りつづけて、その弟桃翠などいふが、朝夕勤めとぶらひ、自の家にも伴ひて、親属の方にもまねかれ、日をふるまに、日とひ郊外に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふ。

それより八幡宮に詣ず。

与一扇の的を射し時、「べっしては我国氏神正八まん」とちかひしもこの神社にてはべると聞けば、感應殊しきりに覚えらる。

暮るれば桃翠宅に帰る。

修験光明寺といふあり。

そこにまねかれて行者堂を拝す。

夏山に 足駄をおがむ かどでかな

10 雲巖寺

当国雲巖寺のおくに佛頂和尚山居跡あり。

豎横の 五尺にたらぬ 草の庵

むすぶもくやし 雨なかりせば

と、松の炭して岩に書き付けはべりと、いつぞや聞こえたまふ。

その跡みむと雲岸寺に杖をひけば、人々すんどもにいざなひ、若き人おほく、道のほど打ちさはぎて、おぼえずかの禁にいたる。

山はおくあるけしきにて、谷道はるかに、松杉黒く、苔しただりて、卯月の天今なお寒し。

十景つくる所、橋をわたつて山門に入る。

さて、かの跡はいづくのほどにやと、後ろの山によちのぼ

れば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。

妙禅師の死関、法雲法師の石室を見るがごとし。

木啄も 庵はやぶらず 夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に残しはべりし。

11 殺生石・遊行柳

これより殺生石に行く。

館代より馬にて送らる。

この口付きの男の子、短冊得させよとこう。

やさしきことを望みはべるものかなと、

野を横に 馬ひきむけよ ほととぎす

殺生石は温泉の
出づる山陰にあり。

石の毒気いまだほろびず。

蜂蝶のたぐひ真砂の色の見えぬほどかさなり死す。

また、清水ながるるの柳は蘆野の里にありて田の畔に残る。

この所の郡守戸部某のこの柳見せばやなど、おりおりに
のたまひ聞こえたまふを、いづくのほどにやと思ひしを、今
日この柳のかげにこそ立ち寄りはべりつれ。

田一枚 植えて立ち去る 柳かな

12 白河

心もとなき日かず重なるままに、白河の関にかかりて、旅心定
まりぬ。

いかで都へと便求めしもことわりなり。

中にもこの関は三関の一にして、風騷の人、心をとどむ。

秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なおあはれな
り。

卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞ
する。

古人冠を正し、衣装を改めしことなど、清輔の筆にもとど
め置かれしとぞ。

卯の花を かざしに関の 晴着かな 曽良

13 須賀川

とかくして越え行くまに、あぶくま川を渡る。

左に会津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて、山つらなる。

かげ沼といふ所を行くに、今日は空曇て物影うつらず。

須賀川の駅に等 窮といふものを尋ねて、四、五日とどめらる。

まず白河の関いかにこえつるやと問う。

「長途のくるしみ、身心つかれ、かつは風景に魂うばはれ、懐旧に腸を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

風流の 初やおくの 田植うた

無下にこえんもさすがに」と語れば、脇・第三とつづけて、三巻となしぬ。

この宿のかたわらに、大きな栗の木陰をたのみて、世をい

とふ僧あり。

椽ひろふ太山もかくやとしづかに覚えられてものに書き付はべる。

其詞、

栗といふ文字は西の木と書きて
西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生
杖にも柱にもこの木を用いたまふとかや。

世の人の 見付けぬ花や 軒の栗

14 安積山

等 窮が宅を出でて五里ばかり、椴皮の宿を離れて安積山あり。

路より近し。

このあたり沼多し。

かつみ刈るころもやや近うなれば、いづれの草を花かつみとはいふぞと、人々に尋ねはべれども、さらに知る人なし。

沼を尋ね、人に問ひ、かつみかつみと尋ねありきて、日は山

の端にかかりぬ。

二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。

15 信夫の里

あくれば、しのぶもぢ摺の石を尋ねて、忍ぶのさとに行く。

遥山陰の小里に石なかば土に埋もれてあり。

里の童べの来たりて教えける。

昔はこの山の上にはべりしを、往來の人の麦草をあらして、この石を試みはべるをにくみて、この谷につき落とせば、石の面下さまにふしたりといふ。

さもあるべきことにや。

早苗とる 手もとや昔 しのぶ摺

16 佐藤庄司が旧跡

月の輪のわたしを超えて、瀬の上といふ宿に出づ。

佐藤庄司が旧跡は、左の山際一里半ばかりにあり。

飯塚の里鯖野と聞きて尋ね尋ね行くに、丸山といふに尋ねあたる。

これ、庄司が旧跡なり。

禁に大手の跡など、人の教ゆるにまかせて涙を落とし、またかたはらの古寺に一家の石碑を残す。

中にも、二人の嫁がしるし、まず哀れなり。

女なれどもかひがひしき名の世に聞こえるものかなと、袂をぬらしぬ。

墮涙の石碑も遠きにあらず。

寺に入りて茶を乞へば、ここに義経の太刀、弁慶が笈をとどめて什物とす。

笈も太刀も 五月にかざれ 帟幟

五月朔日のことなり。

17 飯塚の里

その夜飯塚にとまる。

温泉あれば湯に入りて宿をかるに、土坐に筵を敷て、あやしき貧家なり。

灯もなければ、ゐろりの火かげに寝所をまうけて臥す。

夜に入りて雷鳴、雨しきりに降て、臥る上よりもり、蚤・蚊にせせられて眠らず。

持病さへおこりて、消入ばかりになん。

短夜の空もやうやう明れば、また旅立ぬ。

なお、夜の余波心すまず、馬かりて桑折の駅に出づる。

遥なる行末をかかえて、かかる病覚束なしといへど、羈旅へんどの行脚、捨身無常の観念、道路にしなん、これ天の命なりと、気力いささかととり直し、路縦横に踏で伊達の大木戸をこす。

18 笠嶋

笠嶋・白石の城を過、笠嶋の郡に入れば、藤中將実方の塚はいづくのほどならんと人にとへば、これより遥右に見ゆる山際の里をみのわ・笠嶋といい、道祖神の社・かたみの薄今にありと教ゆ。

このごろの五月雨に道いとあしく、身つかればべれば、よそながら眺やりて過るに、蓑輪・笠嶋も五月雨の折にふれたり

笠嶋は いづこさ月の んかり道

19 武隈の松

岩沼に宿

武隈の松にこそ、目覚る心地はすれ。

根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずとしらる。

まず能因法師思ひ出づ。

その昔むつのかみにて下りし人、この木を伐て、名取川の橋杭にせられたることなどあればにや、「松はこのたび跡もなし」とは詠たり。

代々、あるは伐、あるひは植継などせしと聞くに、今将、千歳のかたちととのほひて、めでたき松のけしきになんはべりし。

「武隈の松みせ申せ遅桜」

と挙白きよはくといふものゝ、餞別せんべつしたりければ、

桜さくらより 松まつは二木ふたきを 三月みつき越し

20 仙台せんだい 仙台

名取川なとりがわを渡わたて仙台せんだいに入る。

あやめふく日なり。

旅宿りよしゆくをもとめて四五日逗留しごにちとうりゆうす。

ここに画工がこう加右衛門かえもんといふものあり。

いささか心ある者ものと聞きて知る人になる。

この者もの、年比としひらさだかならぬ名どころを考かんが置えはればとて、
一日案内ひとひあんないす。

宮城野みやぎのの萩茂はぎしげりあひて、秋あきの景色けしき思ひやらるる。

玉田たまだ・よこ野の・つつじが岡はあせび咲さくころなり。

日影ひかげももらぬ松まつの林はやしに入りて、ここを木きの下したといふとぞ。

昔むかしもかく露つゆふかければこそ、「みさぶらひみかさ」とはよみ

たれ。

薬師堂やくしどう・天神てんじんの御社みやしろなど拝おがみ、その日はくれぬ。

なお、松嶋まつしま・塩竈しおがまの所々ところどころ、画えに書かき送おくる。

かつ、紺こんの染緒そめおつけたる草鞋わらじ二足、餞はなむけす。

さればこそ風流ふうりゅうのしれもの、ここにいたりてその実まことを頭あづわす。

あやめ草ぐさ 足あしに結むすば 草鞋わらじの緒お

かの画図えずにまかせてたどり行ゆば、おくの細道ほそみちの山際やまぎわに十符とふの菅すげあり。

今いまも年々ねんねん十符とふの菅菰すがごもを調ととのえてて国守こくしゅに献けんずといえり。

21 多賀城たがじょう 多賀城

壺つぼ 碑いし 市川村多賀城いちかわむらたがじょうにあり。

つぼの石ぶみは高さ六尺ろくしやく予、横三尺斗よこさんじやくばかりか。

苔こけを穿うちて文字もじかすかなり。

四維しゆい国界こくがいの数里すうりをしるす。

この城、神亀元年、按察使鎮守府將軍大野朝臣東人の所置なり。

天平宝字六年參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣修造而、十二月朔日とあり。

聖武皇帝の御時に當れり。

むかしよりよみ置る哥枕、おほく語伝ふといへども、山崩れ川流て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變じて、その跡たしかならぬことのみを、ここにいたりて疑いなき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱す。

行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、泪も落つるばかりなり。

22 末の松山・塩竈

それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ。

末の松山は寺を造りて末松山といふ。

松のあひあひ皆墓原にて、はねをかはし枝をつらぬる契りの末も、終はかくのごときと、悲しさも増りて、塩がまの浦に入相のかねを聞く。

五月雨の空いささかはれて、夕月夜かすかに、籬が嶋もほど近し。

あまの小舟こぎつれて、肴わかつ声々に、「綱手かなしも」とよみけむ心もしられて、いとど哀れなり。

その夜、目盲法師の琵琶をならして奥じようりといふものをかたる。

平家にもあらず、舞にもあらず。

ひなびたる調子うち上げて、枕ちかうかしましかれど、さがに辺土の遺風忘れざるものから、殊勝に覚えらる。

23 塩竈神社

早朝塩竈の明神に詣。

国守再興せられて、宮柱ふとしく彩椽きらびやかに、石の階九仞に重なり、朝日あけの玉がきをかやかす。

かかる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、吾国の風俗なれと、いと貴けれ。

神前に古き宝燈あり。

かねの戸とびらの面おもてに文治三年和泉三郎寄進いずみのきしんとあり。

五百年ごひゃくねんらい来のおもかげ、今日の前まえにうかびて、そぞろに珍めづらし。

かれは勇義忠孝ゆうぎちゅうこうの士しなり。

佳命かめい今にいたりてしたはずといふことなし。

誠まこと人能道よくを勤つとめ、義ぎを守るまもべし。

名もまたこれにしたがふといえり。

日すでに午ごにちかし。

舟ふねをかりて松嶋まつしまにわたる。

その間かん二里予、雄嶋おじまの磯いそにつく。

24 松島

そもそもことふりにたれど、松島まつしまは扶桑第一ふそうだいいちの好風こうふうにして、
およそ洞庭どうてい・西湖せいこを恥はじず。

東南とうなんより海いを入れて、江えの中三里うちさんり、浙江せつこうの潮うしおをたたふ。

島々しまじまの数かずを尽つくして、畝そものは天あめを指ゆびさし、ふすものは波なみに匍匐はらばう。

あるは二重ふたえにかさなり、三重みえに畳たたみて、左にわかれ右につらなる。

負おえるあり抱いだくあり、児孫愛じそんあいすがごとし。

松まつの緑みどりこまやかに、枝葉しようし汐風しおかぜに吹ふきたはめて、屈曲くつきよくをのづからためたるがごとし。

そのけしき、よう然ぜんとして美人びじんの顔かほを粧よそおふ。

ちはや振神ぶるかみのむかし、大山おおやまずみのなせるわざにや。

造化ぞうかの天工てんこう、いづれの人か筆ふでをふるひ、詞ことばを尽つくさむ。

25 雄島

雄島おじまが磯いそは地ちつづきて海うみに出いでたる島しまなり。

雲居うんご禪師ぜんじの別室べつしつの跡あと、坐ざ禪石ぜんせきなどあり。

はた、松まつの木陰こかげに世よをいとふ人も稀まれ々見えはべりて、落穂おちぼ・松笠まつかさなど打うちけふりたる草くさの庵いおり、閑しずかに住すなし、いかなる人とはしられずながら、まずなつかしく立寄たちよるほどに、月海げつにうつりて、昼ひるのながめまたあらたむ。

江上こうしように歸りて宿やどを求もとむれば、窓まどをひらき二階にかいを作りて、風雲ふううんの中に旅寝たびねするこそ、あやしきまで、妙たえなる心地こころちはせらるれ。

松島まつしまや 鶴つるに身をかれ ほととぎす 曾良そら

よは口をとちて眠ねむらんとしていねられず。

旧庵きゅうあんをわかるる時、素堂松島そどうまつしまの詩うたあり。

原安適松はらあんてきまつがうらしまの和歌わかを贈おくらる。

袋ふくろを解ときて、こよひの友ともとす。

かつ、杉風さんふう・濁子じよくしが発句ほくくあり。

26 瑞巖寺ずいがんじ

十一日、瑞岩寺ずいがんじに詣もつず。

当寺とうじ三十二世さんじにせの昔むかし、真壁まかべの平四郎出家へいしろうしゅつけして入唐にっとう、帰朝きりやうの後開山のちかいざんす。

其その後に雲居うんご禅師ぜんじの徳化とくげによりて、七堂しちどう薨改しうかいまりて、金壁こんべき莊しょう嚴光げんこうを輝かがかし、仏土成就ぶつどうじやうじゆの大伽藍だいがらんとはなれりける。

かの見仏聖けんぶつひじりの寺はいづくにやとしたはる。

27 石巻いしのまき

十二日、平和泉ひらいずみと心ざし、あねはの松まつ・緒だえの橋はしなど聞き伝つたえて、人跡じんせき稀まれに雉兔薨ちとすうじやうの往いきかふ道みちそこともわかず、終ついに路みちふみたがえて、石巻いしのまきといふ湊みなとに出いづ。

「こがね花咲さく」とよみてたてまつりたる金花山きんかさん、海上かいしやうに見わたり、数百すひやくの廻船入江かいせんいりえにつどひ、人家地じんかをあらそひて、竈かまどの煙けむり立ちつづけたり。

思おもひがけずかかる所ところにも来たれるかなと、宿やどからんとすれど、さらに宿やどかす人なし。

漸ようようまどしき小家こいえに一夜いちやをあかして、明あければまたしらぬ道みちまよひ行く。

袖そでのわたり・尾おぶちの牧まき・まの萱かやはらなどよそめにみて、遥はるかなる堤つみを行ゆく。

心こころ細ほそき長沼ながぬまにそふて、戸伊摩といまといふ所ところに一宿いっしゆくして、平泉ひらいずみにいたる。

その間かん廿余里じゅうよりほどとおぼゆ。

28 平泉 ひらいずみ

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。

秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。

まず、高館にのぼれば、北上川南部より流るる大河なり。

衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。

泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。

さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。

国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで泪を落としはべりぬ。

夏草や 兵どもが 夢の跡

卯の花に 兼房みゆる 白毛かな 曽良

かねて耳驚したる二堂開帳す。

経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。

七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、すでに頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、藁を覆て雨風をしのぐ。

しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の 降のこしてや 光堂

29 尿前の関 しとまえ せき

南部道遥に見やりて、岩手の里に泊る。

小黒崎・みづの小嶋を過て、なるこの湯より尿前の関にかかりて、出羽の国に超えんとす。

この路旅人稀なる所なれば、関守にあやしめられて、漸として関をこす。

大山をのぼつて日すでに暮ければ、封人の家を見かけて舍を求む。

三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱 のみしらみ 馬の尿する うまのしと 枕もと まくら

あるじのいふ、これより出羽の国に大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越べきよしをもうす。

さらばといいて人を頼みはべれば、究境の若者、反脇指をよこたえ、櫂の杖を携て、我々が先に立ちて行く。

今日こそ必ずあやうきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後について行く。

あるじのいふにたがはず、高山森々として一鳥声きかず、木の下闇茂りあひて夜る行くがごとし。

雲端につちふる心地して、篠の中踏分踏分、水をわたり岩に蹴て、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。

かの案内せしおのこのいふやう、この道かならず不用のことあり。

恙なうをくりまいらせて仕合したりと、よろこびてわかれぬ。

跡に聞きてさへ胸とどろくのみなり。

30 尾花沢 おばねざわ

尾花沢にて清風といふ者を尋ぬ。

かれは富るものなれども、志いやしからず。

都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知たれば、日ごろとどめて、長途のいたはり、さまざまにもてなしはべる。

涼しさを 我宿にして ねまるなり

這出でよ かひやが下の ひきの声

まゆはきを 俤にして 紅粉の花

蚕飼する 人は古代の すがたかな 曾良

31 山寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。

慈覚大師の開基にして、殊清閑の地なり。

一見すべきよし、人々のすゝむるに依て、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。

日いまだ暮ず。

禁の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。

岩に巖を重ねて山とし、松栢年旧土石老て苔滑に、岩上の院々扉を閉てものの音きこえず。

岸をめくり岩を這て仏閣を拜し、佳景寂寥として心すみ行くのみおぼゆ。

閑さや 岩にしみ入る 蟬の声

32 大石田

最上川のらんと、大石田といふ所に日和を待つ。

「ここに古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、芦角一声の心をやはらげ、この道にさぐりあしして、新古ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなれば」と、わりなき一卷残しぬ。

このたびの風流ここにいたれり。

33 最上川

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。

ごてん・はやぶさなどいふ、おそろしき難所あり。

板敷山の北を流て、果は酒田の海に入る。

左右山覆ひ、茂みの中に舟を下す。

これに稲つみたるをや、稲舟といふならし。

白糸の瀧は青葉の隙隙に落て仙天堂岸に臨て立つ。

水みなぎつて舟あやうし。

五月雨を あつめてはやし 最上川

34 羽黒山

六月三日、羽黒山に登る。

図司左吉といふ者を尋ねて、別当代会寛阿闍利に謁す。

南谷の別院に舍して憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊にをめて誹諧興行。

ありがたや 雪をかほらす 南谷

五日、権現に詣。

当山開 關能除大師はいづれの代の人といふことをしらず。

延喜式に「羽州里山の神社」とあり。

書写、「黒」の字を「里山」となせるにや。

「羽州黒山」を中略して「羽黒山」といふにや。

「出羽」といへるは、「鳥の毛羽をこの国の貢に献る」と風土記にはべるとやらん。

月山・湯殿を合わせて三山とす。

当寺武江東叡に属して天台止観の月明らかに、円頓融通の法の灯かがそひて、僧坊棟をならべ、修験行法を励まし、靈山靈地の験効、人貴かつ恐る。

繁栄長にして、めでたき御山といいつべし。

35 月山

八日、月山にのぼる。

木綿しめ身に引きかけ、宝冠に頭を包、強力といふものに道びかれて、雲霧山気の中に氷雪を踏のぼること八里、さらに日月行道の雲関に入るかとあやしまれ、息絶身こごえて頂上にいたれば、日没て月顕る。

笹を鋪、篠を枕として、臥て明るを待つ。

日出でて雲消れば湯殿に下る。

谷の傍に鍛冶小屋といふあり。

この国の鍛冶、靈水をえらびてここに潔斎して劔を打、終月山と銘を切て世に賞せらる。

かの龍泉に剣を淬とかや。

干将・莫耶のむかしをしたふ。

道に堪能の執あさからぬことしられたり。

岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜のつば

み半ばひらけるあり。

ふり積雪の下に埋て、春を忘れぬ遅さぐらの花の心わりなし。

炎天の梅花ここにかほるがごとし。

行尊僧正の哥の哀れもここに思ひ出でて、猶まさりて覚ゆ。

そうじてこの山中の微細、行者の法式として他言すること
を禁ず。

よりてて筆をとどめて記さず。

坊に帰れば、阿闍利のもとによりて、三山順礼の句々短冊
に書く。

涼しさや ほの三か月の 羽黒山

雲の峯 幾つ崩れて 月の山

語られぬ 湯殿にぬらす 袂かな

湯殿山 銭ふむ道の 泪かな 曾良

36 鶴岡・酒田

羽黒を立ちて、鶴が岡の城下、長山氏重行といふもののふの
家にむかへられて、誹諧一卷あり。

左吉もともにに送りぬ。

川舟に乗りて酒田の湊に下る。

淵庵不玉といふ医師のもとを宿とす。

あつみ山や 吹浦かけて 夕すずみ

暑き日を 海にいらたり 最上川

37 象潟

江山水陸の風光数を尽して、今象潟に方寸を責む。

酒田の湊より東北の方、山を超え礮を伝ひ、いさごをふみて、
その際十里、日影やかたぶくころ、汐風真砂を吹上、雨朦朧
として鳥海の山かくる。

闇中に莫作して、「雨もまた奇なり」とせば、雨後の晴色ま

たたのもしきと、蟹の苦屋に膝をいれて雨の晴るるを待つ。

その朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象潟に船をうかぶ。

まず能因嶋に船をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、「花の上こぐ」とよまれし桜の老木、西行法師の記念をのこす。

江上に御陵あり。

神功后宮の御墓といふ。

寺を干満珠寺といふ。

このところに行幸ありしこといまだ聞かず。

いかなることによ。

この寺の方丈に座して簾を捲ば、風景一眼の中に尽て、南に鳥海天をささえ、その陰うつりて江にあり。

西は有耶無耶の関、路をかぎり、東に堤を築きて秋田にかよふ道遥に、海北にかまえて浪打ち入るる所を汐越といふ。

江の縦横一里ばかり、倅松嶋にかよひてまた異なり。

松嶋は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。

寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や 雨に西施が ねぶの花

汐越や 鶴はぎぬれて 海涼し

祭礼

象潟や 料理何くふ 神祭 曾良

蟹の家や 戸板を敷て 夕涼

みのの国の商人 低耳

岩上に 雉鳩の巢をみる

波こえぬ 契りありてや みさごの巢 曾良

38 越後路

酒田の余波日を重ねて、北陸道の雲に望む、遙々のおもひ胸をいたましめて加賀の府まで百卅里と聞く。

鼠の関をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の国市振の関にいたる。

この間九日、暑湿の勞に神をなやまし、病おこりてことをしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や 佐渡によこたふ 天河

39 市振

今日は親しらず子しらず・犬もどり・駒返しなどいふ北国一の難所を超えてつかればれば、枕引きよせて寐たるに、一间隔てて面の方に若き女の声二人ばかりと聞こゆ。

年老たる男の声も交て物語するを聞けば、越後の国新潟といふ所の遊女なりし。

伊勢参宮するとして、この関まで男の送りて、あすは古郷にかへす文したためて、はかなき言伝などしやるなり。

「白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましく下りて、定めなき契り、日々の業因いかにつたなし」と、ものいふを聞く聞く寝入て、あした旅立に、我々にむかひて、

「行衛しらぬ旅路のうき、あまり覚束なう悲しくはあれば、見えがくれにも御跡をしたひはべらん。衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて結縁せさせたまへ」と涙を落とす。

不便のことにははべれども、「我々は所々にてとどまる方おほし。ただ人の行くにまかせて行くべし。神明の加護かならずつつがなかるべし」といひ捨て出でつつ、哀れさしばらくやまざりけらし。

一家に 遊女もねたり 萩と月

曾良にかたれば、書とどめはべる。

40 越中路

黒部四十八ヶ瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古といふ浦に出づ。

担籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀れとふべきものをと人に尋ねれば、「これより五里いそ伝ひして、むかふの山陰にいたり、蜃の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじ」といひをどされて、加賀の国に入る。

わせの香や 分入右は 有磯海

41 金沢・小松

卯の花山・くりからが谷をこえて、金沢は七月中の五日なり。

ここに大坂よりかよふ商人何処といふ者あり。

それが旅宿をとみにす。

一笑といふものは、この道にすける名のほのぼの聞えて、世に知人もはべりしに、去年の冬早世したりとて、その兄追善をもよおすに、

塚も動け 我泣声は 秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し 手ごとにむけや 瓜茄子

途中吟

あかあかと 日はつれなくも 秋の風

小松といふ所にて

しほらしき 名や小松ふく 萩すすき

この所太田の神社に詣。

真盛が甲・錦の切あり。

往昔源氏に属せし時、義朝公よりたまはらせたまふとかや。

げにも平士のものにあらず。

目庇より吹返しまで、菊唐草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鉄形打ったり。

真盛討死の後、木曾義仲願状にそへてこの社にこめられはべるよし、樋口の次郎が使せしことも、まのあたり縁記にみえたり。

むざんやな 甲の下の きりぎりす

42 那谷・山中温泉

山中の温泉に行くほど、白根が獄跡にみなしてあゆむ。

左の山際に観音堂あり。

花山の法皇三十三所の順礼とげさせたまひて後、大慈大悲の像を安置したまひて、那谷と名付たまふとなり。

那智・谷組の二字をわかはべりしとぞ。

奇石さまざまに、古松植ならべて、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。

石山の 石より白し 秋の風

温泉に浴す。

その功有明につぐといふ。

山中や 菊はたおらぬ 湯の匂

あるじとするものは久米之助とていまだ小童なり。

かれが父誹諧を好み、洛の貞室若輩のむかしここに来たりしころ、風雅に辱しめられて、洛に帰て貞徳の門人となつて世にしらる。

功名の後、この一村判詞の料を請ずといふ。

今更むかし語とはなりぬ。

43 全昌寺

曾良は腹を病て、伊勢の国長嶋といふ所にゆかりあれば、先立て行くに、

行行て たふれ伏と も萩の原 曾良

と書置たり。

行くものの悲しみ、残るもののうらみ、隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし。

よもまた、

今日よりや 書付消さん 笠の露

大聖持の城外、全昌寺といふ寺にとまる。

なお加賀の地なり。

曾良も前の夜この寺に泊て、

終宵 秋風聞くや うらの山

と残す。

一夜の隔て、千里に同じ。

われも秋風を聞きて衆寮にふせば、明ぼのの空近う、読経声
すむままに、鐘板鳴て食堂に入る。

今日は越前の国へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども
紙硯をかかえ、階のもとまで追來たる。

折節庭中の柳散れば、

庭掃て 出でばや寺に 散柳

とりあへぬさまして草鞋ながら書捨つ。

44 汐越の松

越前の境、吉崎の入江を舟に棹して汐越の松を尋ぬ。

終宵嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松 西行

この一首にて数景尽たり。

もし一辨を加るものは、無用の指を立るがごとし。

45 天龍寺・永平寺

丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。

また金沢の北枝といふもの、かりそめに見送りて、このところ
までしたひ來たる。

ところどころの風景過さず思ひつづけて、折節あはれなる作意
など聞こゆ。

今すでに別に望みて、

物書て 扇引きさく なごりかな

五十丁山に入りて永平寺を礼す。

道元禅師の御寺なり。

邦機千里を避て、かかる山陰に跡をのこしたまふも、貴きゆ
へありとかや。

46 福井

福井は三里計なれば、夕飯したためて出づるに、たそがれの

道たたとし。

ここに等裁とうさいといふ古き隠士いんじあり。

いづれの年にか江戸えどに來たりてよを尋ねたず。

遥はるか十とせあまりなり。

いかに老おいさらばひてあるにや、はた死しけるにやと人に尋ねたずは
べれば、いまだ存命ぞんめいしてそこそこ教ゆ。

市中しちゆうひそかに引入ひきいりて、あやしの小家こいえに夕顔ゆうがお・へちまのはえか
かりて、鶏頭けいとうはは木々きぎに戸とぼそをかくす。

さてはこのうちにこそと門かどを扣たたげ、侘わびしげなる女の出いでて、
「いづくよりわたりたまふ道心どうしんの御坊ごぼうにや。

あるじはこのあたり何がしといふものの方かたに行ゆきぬ。

もし用あらば尋ねたまへ」といふ。

かれが妻つまなるべしとしらる。

むかし物がたりにこそかかる風情ふぜいははべれと、やがて尋ねたずあ
ひて、その家に二夜ふたよとまりて、名月めいげつはつるがのみなにとた
び立だつ。

等裁とうさいもともに送おくらんと、裾すそおかしうからげて、道の枝折しおりと
うかれ立たつ。

47 敦賀つるが

漸ようよう白根しらねが嶽だけかくれて、比那ひなが嵩だけあらはる。

あさむづの橋をわたりて、玉江たまえの蘆あしは穂ほに出いでにけり。

鶯うぐいすの関せきを過すぎて湯尾峠ゆのおとうげを越これば、燧ひうちが城じやう、かへるやまに初鴈はつかり
を聞きて、十四日の夕ぐれつるがの津つに宿やどをもとむ。

その夜、月ことに晴はれたり。

「あすの夜もかくあるべきにや」といへば、「越路こしじのならひ、
なお明夜めいやの陰晴いんせいはかりがたし」と、あるじに酒すすめられて、
けいの明神みやうしんに夜参やさんす。

仲哀ちゆうあい天皇てんのうの御廟ごびやうなり。

社頭しゃとう神さびて、松の木この間に月いりのもり入たる、おまへの白砂霜はくさしも
を敷しけるがごとし。

「往昔そのかみ遊行ゆぎやう二世にせの上人しやうにん、大願たいがん発起はつっきのことありて、みづから草
を刈かり、土石どせきを荷になひ、泥濘でいていをかはかせて、参詣さんけい往來おうらいの煩わづらなし。

古例これい今にたえず。

神前^{しんぜん}に真砂^{まさご}を荷^{にな}ひたまふ。

これを遊行^{ゆぎよう}の砂持^{すなもち}ともうしはべる」と、亭主^{ていしゅ}のかたりける。

月清^{きよ}し 遊行^{ゆぎよう}のもてる 砂の上

十五日、亭主^{ていしゅ}の詞^{ことば}にたがはず雨降^{あめふる}。

名月^{めいげつ}や 北国^{ほつくく}日和^{より} さだめなき

48 種の浜^{いろう はま}

十六日、空霽^{そらはれ}たれば、ますほの小貝^{こがい}ひろはんと種^{いろう}の浜^{はま}に舟^はを走^はす。

海上^{かいじょう}七里^{しちり}あり。

天^{てん}屋^や何^{なに}某^{がし}といふもの、破籠^{わりご}・小竹^{ささ}筒^えなどこまやかにしたためさせ、しもべあまた舟にとりのせて、追風^{おいかぜ}時のまに吹^ふき着^つきぬ。

浜^{はま}はわづかなる海士^{あま}の小家^{こいえ}にて、侘^{わび}しき法花^{ほっけ}寺^{でら}あり。
ここに茶^ちを飲^{のみ}、酒^{さけ}をあたたためて、夕^{ゆふ}ぐれのさびしさ感^{かん}に堪^{たえ}たり。

寂^{さび}しさや 須磨^{すま}にかちたる 浜^{はま}の秋

波^なの間^まや 小貝^{こがい}にまじる 萩^{はぎ}の塵^{ちり}

その日のあらし、等^{とう}裁^{さい}に筆^{ふで}をとらせて寺^{のこす}に残^{のこす}。

49 大垣^{おおがき}

露通^{ろつう}もこのみなとまで出^いでむかひて、みのの国^{とこな}へと伴^{ともな}ふ。

駒^{こま}にたすけられて大垣^{おおがき}の庄^{しょう}に入^いれば、曾良^{そら}も伊勢^{いせ}より来^きたり合^あひ、越人^{えつじん}も馬^{うま}をとばせて、如行^{じょこう}が家^いに入り集^{あつ}まる。

前川^{ぜんせん}子^し・荊口^{けいこう}父^ふ子^し、そのほかしたしき人々^{ひと}日夜^{にちや}とぶらひて、蘇生^{そせい}のものに会^あふがごとく、かつ悦^{よろこ}び、かついたはる。

旅^{たび}のものうさも、いまだやまざるに、長月^{ながつき}六日^{むいか}になれば、伊勢^{いせ}の遷宮^{せんぐう}おがまんと、また舟^{ふね}にのりて、

蛤^{はまぐり}の ふたみにわかれ 行く秋^{あき}ぞ